

# パネル企画 要旨

## パネル企画1

心理学・音楽理論・美学

—— 変化するメソドロジー ——

コーディネーター：小寺未知留（西日本支部）

パネリスト：

西田絃子（西日本支部）

小川将也（東日本支部）

源河亨（非会員）

コメンテーター：野家啓一（非会員）

「音楽研究はバベルの塔になりつつある。」— K. コーシン Kevin Korsyn は音楽研究の専門分化をこのように言い表したが（2003: 16）、音楽を対象とする学問領域の境界は可変的・流動的であり、かつ、しばしば「翻訳」が必要となる他の領域との交流・軋轢の中でそれぞれの知を形成・蓄積してきた。なかでも心理学は音楽理論家や音楽美学者にとって重要な参照先であり、その知見はしばしば彼/彼女らの思索に反映されている。そのため、そこで参照されている心理学的知見や参照のあり方について理解を深めることは、彼/彼女らの論述・主張を的確に読解する上で不可欠だけでなく、音楽に関する知が複数の学問領域の中でいかに形成されてきたのかを明らかにするためにも必須である。しかしながら、このような心理学との関わりは、音楽の歴史研究において見過ごされがちであった。本パネルでは、心理学的知見を参照する 19 世紀後半以降の音楽理論や音楽美学の研究事例を複数示すことによって、音楽に関わる学術史研究の拡がりをも提示する。西田は、H. リーマン Hugo Riemann による『音楽学提要』と音想像論（1908、16）から、心理学と美学・音楽理論の領域化を読み解く。小川は、R. ヴァラシエク Richard Wallaschek のタクト論を通じて世紀転換期ウィーンにおける音楽美学と心理学との関係を問う。小寺は、心理学者 B. ロスナー Burton Rosner と音楽理論家 L. マイヤー Leonard Meyer の共同研究（1982、86）の経緯を書簡などから再構成する。源河は、音楽と感情の関係に焦点を合わせ、現代の音楽美学と音楽心理学の影響関係について考察する。これらの事例を通して、ナショナリズムやジェンダーなどの概念と同様に、学問領域・分野やその関係性が歴史研究の重要な論点になることを提示する。同時に、こうした音楽研究史の企図は、音響学や教育学など、音楽に関する他の学問分野についての歴史研究にも一定のモデルを提供しうる。

## パネル企画2

批判校訂全集からみるバルトーク研究の現在  
—— 『マイクロコスモス』 合評を中心に ——

コーディネーター：岡本佳子（東日本支部）

司会：太田峰夫（東日本支部）

紹介とリプライ：中原佑介（西日本支部）

パネリスト：

浅井佑太（西日本支部）

伊東信宏（西日本支部）

岡本佳子（東日本支部）

子安ゆかり（東日本支部）

2016年、ヘンレ社とエディツィオ・ムジカ・ブダペスト社の共同出版でブダペストのバルトーク・アーカイヴ編纂によるバルトーク批判校訂全集（以下、バルトーク全集）の刊行が開始された。その構想と議論は1970年代に始まり、編纂者の育成を経て、2040年代までに全48巻の出版が予定されている。

ギリースが指摘するように、構想から2015年の作曲家死後70年経過までの間、音楽学における批判校訂全集の意味は大きく変容した。手稿譜、初版等のオンライン公開や多くの原典版があるショパンの例を俟つまでもなく、「ただ一つの真正なテキスト」の意味がなくなりつつある今日、バルトーク全集においても、通常期待される「信頼されるテキストを後世に残す」という目的に加え、演奏等の実用面にも利する形での意義づけがなされた。具体的には作曲に使用された民俗音楽原曲、重要とされる自筆譜のファクシミリやトランスクリプション、演奏時間やテンポなど作曲家の自演にもとづくデータの掲載等がそれにあたる。ピアノ練習曲集『マイクロコスモス』（中原佑介編、2020年）を例にとると、解説や演奏の手引きと実際の楽譜による第1巻、そして校訂報告の第2巻からなる。しかし後者において厳密な意味での「校訂報告」が占める割合はわずかであり、その多くでは全153曲と練習のための33曲についての自筆譜研究をもとにした作曲過程が詳述され、それ自体が編纂者による浩瀚な研究書の様相を呈している。

本企画ではバルトーク全集出版、原典版や普及版、データベース公開等の関連プロジェクト概観のあと、『マイクロコスモス』を中心にパネリストからバルトーク研究、演奏、自筆譜研究、他作曲家との比較等の観点から批評や問題提起を行う。さらに編纂者自身の応答を通じて、2021年に生誕140年を迎えたバルトーク研究の動向を追うとともに、広く全集出版の現代的意義への議論につなげる。

## パネル企画3

作曲家としての F.-J. フェティス

—— 没後 150 年を記念して ——

コーディネーター：大迫知佳子（西日本支部）

パネリスト：

大迫知佳子（西日本支部）

友利 修（東日本支部）

山上揚平（東日本支部）

木内 涼（東日本支部）

コメンテーター：星谷丈生（非会員・作曲家）

F.-J. フェティス（1784-1871）は、フランスやベルギーを中心に、19 世紀の西欧で大きな影響力を揮った音楽家である。フェティスについては、これまで、その音楽理論・思想、音楽評論活動、音楽教育活動等さまざまな面にかんする研究が進められてきた（Christensen 2019, Rémy 2013 等）。しかし、とりわけ 19 世紀当時のフランス語圏において演奏・批評され、その音楽文化の一端を担ったであろう彼の作曲作品にかんしては、未だほとんど議論がなされていない。

本パネルでは、フェティスの作曲作品の特徴を明らかにし、それをフランスの音楽作品史に位置づけることを通して、フェティス作品の歴史的・現代的意義について考察することを目指す。

まず大迫が、フェティスにかんする研究状況等を踏まえて、本パネルの趣旨を説明する。そのうえで、木内が 19 世紀前期フランスにおけるオペラ・コミックを巡る諸問題（多様化するジャンルの筋書きや音楽の在り方等）を扱い、山上が同時期のフランスにおける音楽理論・思想・器楽作品の関係を俯瞰的に論じる。一方で、友利はオペラ・コミック《双子姉妹》（1823）、大迫は《ピアノとバイオリンのためのグラン・デュオ》（1821）に焦点を当て、日本初演音源（2019, 2021）も用いて、フェティスの初期作品の特徴をそれぞれ明らかにする。これら 4 人の発表をもとに、19 世紀フランスの音楽作品史におけるフェティス作品の位置づけを探る。

本年は、フェティス没後 150 周年にあたる。この記念の年に、作曲家としてのフェティスに光を当て、パネリストおよびオーディエンスとともにフェティスの新たな側面について考えてみたい。